仙台ターミナルケアを考える会３０周年に寄せて

スペルマン病院　緩和ケア内科部長　亀岡祐一

仙台ターミナルケアを考える会設立３０周年にあたり、先ずは、現会長吉永馨先生を始め発足時より当会を支えてこられた諸先輩方の不断のご尽力にあらためて敬意を表したいと思います。
私が当会の会員になったのは平成１０年、スペルマン病院に緩和ケア病棟が開設され私がホスピス専任医師に決まったことが契機でした。医師になって１０年にも満たず、緩和ケアの知識も経験もほぼ皆無だった若輩者の私に対し、関係者の皆さまにどれだけ温かい励ましやご指導をいただいたか、２０年経ったいま思い起こしても感謝の念に堪えません。この場をお借りして深く御礼申し上げます。
今回「今後の当会の働きに期待すること」を書くようにご要請をいただきましたが、私もスペルマン病院ホスピスも開設以来ずっと当会の皆さまにはお世話になりっぱなしであったわけですので、これ以上の期待を述べることなど分不相応かと存じます。そこで、本稿では、私どもが当会の皆さまにいかに支えられてここまで歩んで来ることができたのかを振り返り、皆さまにお伝えしたいと思います。

当会や「ホスピス設置を願う会（現「春風の家」)」の「宮城県に緩和ケア病棟を！」という精力的な働きかけが実り、スペルマン病院に緩和ケア病棟が開設されたのは平成１０年の５月でした。
私が同病院に就職したのは、そのわずか半年前でした。医師としても人間としても未熟な私に対して（大学を卒業してわずか７年、３０歳の時でした)、関係者の皆さまには不安しかなかったのではないかと思います。今でもよく覚えていますが、山室誠先生、故岡部健先生、小笠原鉄郎先生などが私のために激励会を開いてくださり、「困ったことがあったら遠慮せずに何でも相談するように」と仰っていただいたことが昨日のことのようです。
それがきっかけで、労災病院の緩和ケアカンファレンスに参加させていただくことになりました。カンファレンスには小笠原先生はもちろん、当時労災病院の院長だった吉永馨先生も参加されていて、毎回毎回非常に中身の濃い時間でした。(ある患者さんのケアの振り返りで、看護師が「どうしたら患者さんを説得できるか悩みました」と発言したところ、吉永先生が「『説得』するのではなく、『納得していただく』のですよ」と丁寧にご指導されている場面が深く心に残っています)

また、同じ頃に名取の岡部医院にも何度かお邪魔させていただく機会がありました。当時は岡部医院も開業直後で、診療所は改修した一般住宅を使っていました。昼食を兼ねたカンファレンスが、コタツで和気藹々と行われていたことを思い出します。
岡部先生は、ご自身が開業したばかりで大変だったにも関わらず、私たちのことをいろいろと気にかけてくださっていました。常に広い視野で先々のことを見据え、しかし同時にひとつひとつ目の前のことを丁寧に行うことの大切さをご自身の行動をもって示してくださいました。なにも恩返しができないまま、逝ってしまわれたことが本当に残念でなりません。ここであらためて哀悼の意を表したいと思います。

スペルマン病院ホスピス開設後数年の間、私は当会の役員を務めさせていただきました。毎月の定例役員会でも皆さまには本当にお世話になりました。当時県内唯一であった当院ホスピスの現状を報告させていただくことで、多少なりとも地域の緩和ケアの発展に寄与ができたのではないかと思いますが、むしろ役員の諸先輩方に悩みや愚痴を聞いていただいたり出来たことが、私にとっては貴重な時間だったと思います。
あれから２０年、平成の世も幕を閉じようとしている今、私たちに求められているのは、時代のニーズに合った緩和ケア・ホスピスケアを提供できるよう努力を怠らないことと、一方ではいつの時代になっても変わってはいけないホスピスマインドを新しい世代に伝えていくことだと感じています。